

20-26

特 62
571



大日本帝國憲法



031616-000-1

CZ-212-016

大日本帝國憲法

靜觀堂

M22

BBE-0243



No 15415

CZ
212
016



● 憲法發布勅語

朕ノ隆昌ト臣民ノ慶福トヲ以テ
 朕ガ祖宗ニ承ルノ大權ニ依リ
 朕ニ對シ此不磨ノ大典ヲ宣布ス
 臣民祖先ノ協力補翼ニ依リ
 我宗ハ我臣民祖先ノ垂レタリ是ニ我神聖ナ
 肇造シ以テ無窮ニ垂レタリ是ニ我神聖ナ
 遺德ト并ニ臣民ノ忠實勇武ニ成蹟ヲ
 公ニ殉ヒ以テ此光輝アル國史ノ成蹟ヲ
 愛シタルナリ朕我臣民ハ則チ祖宗ノ忠貞ナル
 子孫ナリ朕我臣民ハ則チ祖宗ノ忠貞ナル
 承遵シ相共ニ和衷協同シ益ヲ奉體シ光
 外ニ宣揚シ祖ノ遺業ヲ永久ニ鞏固ナ
 中ニ爾ノ希望ヲ同クシ此負擔ヲ分ツニ堪
 疑ハサルナリクシ此負擔ヲ分ツニ堪



●帝國憲法

朕祖宗ノ威烈ヲ承ケ萬世一系ノ帝位ヲ履ミ朕ガ親愛スル所ノ臣民ハ即チ朕ガ祖宗ノ惠撫慈養シ給ヒシ所ノ臣民ナルヲ思ヒ其幸福ヲ増進シ其彝徳良能ヲ發達セシメシ事ヲ願ヒ又其翼贊ニ依リ與ニ俱ニ國家ノ進運ヲ扶持セシ事ヲ望ミ即チ明治十四年十月十四日ノ詔命ヲ履踐シ茲ニ大憲ヲ制定シ朕ガ率由スル所ヲ示シ朕ガ後嗣及ビ臣民及ビ臣民ノ子孫タルモノヲシテ永遠ニ遵行スル所ヲ知ラシム國家統治ノ大憲ハ朕ガ之ヲ祖宗ニ承ケテ之ヲ子孫ニ傳フル所ナリ朕及ビ朕ガ子孫ハ將來此憲法ノ條章ニ循ヒ之ヲ行フ事ヲ愆ラザルベシ朕ハ吾臣民ノ權利及ビ財產ノ安全ヲ貴重シ及ビ之ヲ保護シ此憲法及ビ法律ノ範圍内ニ於テ其享有テ完全ナラシムベキ專チ宣言ス帝國議會ハ明治廿三年ヲ以テ之ヲ召集シ議會開會ノ時ヲ以テ此憲法ヲシテ有効ナラシムルノ期トスベシ將來若シ此憲法ノ或ル條章ヲ

改定スルノ必要ナル時宜チ見ルニ至ラハ朕及ビ朕ガ系統ノ子孫ハ發議ノ權ヲ取リ之ヲ議會ニ附シ議會ハ此憲法ニ定メタル要件ニ依リ之ヲ議決スルノ外朕ガ子孫及ビ臣民ハ敢テ之ガ變更ヲ試ル事ヲ得ザルベシ朕ガ在廷ノ大臣ハ朕ガ爲メニ此憲法ヲ施行スルノ責ニ任ズベク朕ガ現在及ビ將來ノ臣民ハ此憲法ニ對シ永遠ニ從順ニ義務ヲ負ベシ

御名 御璽

內閣總理大臣 伯爵 黒田清隆
 樞密院議長 伯爵 伊藤博文
 外務大臣 伯爵 大隈重信
 大藏大臣 兼 伯爵 松方正義
 內務大臣 伯爵 松方正義
 陸軍大臣 伯爵 大山 巖
 海軍大臣 伯爵 西郷從道
 司法大臣 伯爵 山田顯義

明治二十二年
 二月十一日

文部大臣 子爵森 有禮
農商務大臣 伯爵井上 馨
遞信大臣 子爵榎本武揚

大日本帝國憲法

第一章 天皇

第一條 大日本帝國ハ萬世一系ノ天皇之ヲ統治ス
第二條 皇位ハ皇室典範ノ定ムル所ニ據リ皇男子孫之ヲ繼承ス

第三條 天皇ハ神聖ニシテ侵スヘカラス
第四條 天皇ハ國ノ元首ニシテ統治權ヲ總攬シ此憲法ノ

條規ニ據リ之ヲ行フ

第五條 天皇ハ帝國議會ノ協贊ヲ以テ立法權ヲ行フ
第六條 天皇ハ法律ヲ裁可シ其公布及ヒ執行ヲ命ス

第七條 天皇ハ帝國議會ヲ召集シ其開會閉會停會及ヒ衆議院ノ解散ヲ命ズ

第八條 天皇ハ公共ノ安全ヲ保持シ又ハ其災厄ヲ避クル

爲メ緊急ノ必要ニ依リ帝國議會閉會ノ場合ニ於テ法律ニ代ルヘキ勅令ヲ發ス此勅令ハ次ノ會期ニ於テ帝國議會ニ提出スヘシ若シ議會ニ於テ承諾セザル時ハ政府ハ將來ニ向ヒテ其効力ヲ失フ事ヲ公布スヘシ

第九條 天皇ハ法律ヲ執行スル爲メニ又ハ公共ノ安寧秩序ヲ保持シ及ヒ臣民ノ幸福ヲ増進スル爲メニ必要ナル命令ヲ發シ又ハ發セシム但命令ヲ以テ法律ヲ變更スル事ヲ得ズ

第十條 天皇ハ行政各部ノ官制及ヒ文武官ノ俸給ヲ定メ及ヒ文武官ヲ任免ス但此憲法又ハ他ノ法律ニ特例ヲ掲ゲタルモノハ各其條項ニ據ル

第十一條 天皇ハ陸海軍ヲ統帥ス

第十二條 天皇ハ陸海軍ノ編制及ヒ常備兵額ヲ定ム

第十三條 天皇ハ戰ヲ宣シ和ヲ媾シ及ヒ諸般ノ條約ヲ訂

結ス

第十四條 天皇ハ戒嚴ヲ宣告ス戒嚴ノ要件及ビ効力ハ法律ヲ以テ之ヲ定ム

第十五條 天皇ハ爵位勳章及ビ其他ノ榮典ヲ授與ス

第十六條 天皇ハ大赦特赦減刑及ビ復權ヲ命ズ

第十七條 攝政ヲ置クハ皇室典範ノ定ムル所ニ依ル攝政

ハ天皇ノ名ニ於テ大權ヲ行フ

第二章 臣民權利義務

第十八條 日本臣民タルノ要件ハ法律ノ定ムル所ニ依ル

第十九條 日本臣民ハ法律命令ノ定ムル所ノ資格ニ應ジ

均シク文武官ニ任ゼラレ及ビ其他ノ公務ニ就ク事ヲ得

第二十條 日本臣民ハ法律ノ定ムル所ニ從ヒ兵役ノ義務

ヲ有ス

第二十一條 日本臣民ハ法律ノ定ムル所ニ從ヒ納稅ノ義務

ヲ有ス

第二十二條 日本臣民ハ法律ノ範圍内ニ於テ居住及ビ移

轉ノ自由ヲ有ス

第二十三條 日本臣民ハ法律ニ依ルニアラズシテ逮捕監

禁審問處罰ヲ受クル事ナシ

第二十四條 日本臣民ハ法律ニ定メタル裁判官ニ裁判ヲ

受クルノ權ヲ奪ハル、事ナシ

第二十五條 日本臣民ハ法律ニ定メタル場合ヲ除クノ外

其許諾ナクシテ住所ニ侵入セラレ及ビ搜索セラル、事

ナシ

第二十六條 日本臣民ハ法律ニ定メタル場合ヲ除クノ外

信書ノ秘密ヲ侵サル、事ナシ

第二十七條 日本臣民ハ其所有權ヲ侵サル、事ナシ公益

ノ爲メ必要ナル處分ハ法律ノ定ムル所ニ依ル

第二十八條 日本臣民ハ安寧秩序ヲ妨グズ及ビ臣民タル

ノ義務ニ背カザル限ニ於テ信教ノ自由ヲ有ス

セ

第二十九條 日本臣民ハ法律ノ範圍内ニ於テ言論著作印
行集會及ビ結社ノ自由ヲ有ス

第三十條 日本臣民ハ相當ノ敬禮ヲ守リ別ニ定ムル所ノ
規定ニ從ヒ請願ヲ爲ス事ヲ得

第三十一條 本章ニ掲ゲタル條規ハ戰時又ハ國家事變ノ
場合ニ於テ天皇大權ノ施行ヲ妨グル事ナシ

第三十二條 本章ニ掲ゲタル條規ハ陸海軍ノ法令又ハ規
律ニ牴觸セザルモノニ限り軍人ニ準行ス

第三章 帝國議會

第三十三條 帝國議會ハ貴族院衆議院ノ兩院ヲ以テ成立
ス

第三十四條 貴族院ハ貴族院令ノ定ムル所ニ依リ皇族華
族又ビ勅任セラレタル議員ヲ以テ組織ス

第三十五條 衆議院ハ撰舉法ノ定ムル所ニ依リ公撰セラ
レタル議員ヲ以テ組織ス

第三十六條 何人モ同時ニ兩議院ノ議員タル事ヲ得ズ

第三十七條 總テ法律ハ帝國議會ノ協賛ヲ經ルヲ要ス

第三十八條 兩議院ハ政府ノ提出スル法律案ヲ議決シ及
ビ各法律案ヲ提出スル事ヲ得

第三十九條 兩議院ノ一ニ於テ否決シタル法律案ハ同會
議中ニ於テ再ビ提出スルコトヲ得ズ

第四十條 兩議院ハ法律又ハ其他ノ事件ニ付キ各其意見
ヲ政府ニ建議スル事ヲ得但其採納ヲ得ザルモノハ同會
期中ニ於テ再ビ建議スル事ヲ得ズ

第四十一條 帝國議會毎年之ヲ召集ス

第四十二條 帝國議會ハ三箇月ヲ以テ會期トス必要アル
場合ニ於テハ勅命ヲ以テ之ヲ延長スル事アルベシ

第四十三條 臨時緊急ノ必要アル場合ニ於テ常會ノ外臨
時會ヲ召集スベシ臨時會ノ會期ヲ定ムルハ勅命ニ依ル

第四十四條 帝國議會ノ開會閉會會期ノ延長及ビ停會ハ

兩院同時ニ之ヲ行フヘシ衆議院解散ヲ命ゼラレタル時
ハ貴族院ハ同時ニ停會セラルベシ

第四十五條 衆議院解散ヲ命ゼラレタル時ハ勅命ヲ以テ
新ニ議員ヲ選舉セシメ解散ノ日ヨリ五箇月以内ニ之ヲ
召集スベシ

第四十六條 兩議院ハ各其總議員三分ノ一以上出席スル
ニアラザレハ議事ヲ開キ議決ヲナス事ヲ得ズ

第四十七條 兩議院ノ議事ハ過半數ヲ以テ決ス可否同數
ナル時ハ議長ノ決スル所ニ依ル

第四十八條 兩議院ノ會議ハ公開ス但政府ノ要求又ハ其
院ノ決議ニ依リ秘密會トナス事ヲ得

第四十九條 兩議院ハ各天皇ニ上奏スル事ヲ得
第五十條 兩議院ハ臣民ヨリ提出スル請願書ヲ受クル事
ヲ得

第五十一條 兩議院ハ此憲法及ビ議院法ニ掲グルモノノ

外内部ノ整理ニ必要ナル諸規則ヲ定ムル事ヲ得

第五十二條 兩議院ノ議員ハ議院ニ於テ發言シタル意見
及ビ表決ニ就キ院外ニ於テ責ヲ負フ事ナシ但議員自カ
ラ其言論ヲ演說刊行筆記又ハ其他ノ方法ヲ以テ公布シ
タル時ハ一船ノ法律ニ依リ處分セラルベシ

第五十三條 兩議院ノ議員ハ現行犯罪又ハ内亂外患ニ關
ル罪ヲ除ク外會期中其院ノ許諾ナクシテ逮捕セラル、
事ナシ

第五十四條 國務各大臣及政府委員ハ何時タリトモ各議
院ニ出席シ及ビ發言スル事ヲ得

第四章 國務大臣及樞密顧問

第五十五條 國務大臣ハ天皇ヲ補弼シ其責ニ任ズ總テ法
律勅令其他國務ニ關ル詔勅ハ國務大臣ノ副書ヲ要ス

第五十六條 樞密顧問ハ樞密院官制ノ定ムル所ニ依リ
天皇ノ諮詢ニ應ヘ重要ノ國務ヲ審議ス

第五章 司法

第五十七條 司法權ハ天皇ノ名ニ於テ法律ニ依リ裁判所
之ヲ行フ裁判所ノ構成ハ法律ヲ以テ之ヲ定ム

第五十八條 裁判官ハ法律ニ定メタル資格ヲ備フルモノ
ヲ以テ之ニ任ズ裁判官ハ刑法ノ宣告又ハ懲戒ノ處分ニ
依ルノ外其職ヲ免ゼラル、事ナシ懲戒ノ條規ハ法律ヲ
以テ之ヲ定ム

第五十九條 裁判ノ對審判決ハ之ヲ公開ス但安寧秩序又
ハ風俗ヲ害スルノ虞アル時ハ法律ニ依リ又ハ裁判所ノ
決議ヲ以テ對審ノ公開ヲ停ムル事ヲ得

第六十條 特別裁判所ノ管轄ニ屬スベキモノハ別ニ法律
ヲ以テ之ヲ定ム

第六十一條 行政官廳ノ違法處分ニ依リ權利ヲ侵害セラ
レタリトスルノ訴訟ニシテ別ニ法律ヲ以テ定メタル行
政裁判所ノ裁判ニ屬スベキモノハ司法裁判所ニ於テ受

理スルノ限リニアラズ

第六章 會計

第六十二條 新ニ租稅ヲ課シ及ビ稅率ヲ變更スルハ法律
ヲ以テ之ヲ定ムベシ但法章ニ屬スル行政上ノ手数料及
ビ其他ノ收納金ハ前項ノ限ニアラズ國債ヲ起シ及ビ豫
算ニ定メタルモノヲ除ク外國庫ノ負擔トナルベキ契約
ヲ爲スハ帝國議會ノ協贊ヲ經ベシ

第六十三條 現行ノ租稅ハ更ニ法律ヲ以テ之ヲ改メザル
限ハ舊ニ依リ之ヲ徵收ス

第六十四條 國家ノ歲出歲入ハ毎年豫算ヲ以テ帝國議會
ノ協贊ヲ經ベシ豫算ノ慣行ニ超過シ又ハ豫算ノ外ニ生
シタル支出アル時ハ後日帝國議會ノ承諾ヲ求ムルヲ要
ス

第六十五條 豫算ハ前ニ衆議院ニ提出スベシ

第六十六條 皇室經費ハ現在ノ定額ニ據リ毎年國庫ヨリ

之ヲ支出シ將來増額ヲ要スル場合ヲ除クノ外帝國議會
ノ協賛ヲ要セズ

十四

第六十七條 憲法上ノ大權ニ基ケル規定ノ歳出及ビ法律
ノ結果ニ依リ又ハ法律上ニ依リ府ノ義務ニ属スル歳出ハ政
府ノ同意ヲクシテ帝國議會之ヲ廢除シ又ハ削減スル事
ヲ得ズ

第六十八條 特別ノ須要ニ依リ政府ハ豫メ年限ヲ定メ繼
續費トシテ帝國議會ノ協賛ヲ求ムル事ヲ得

第六十九條 避クベカラザル豫算ノ不足ヲ補フ爲メニ又
ハ豫算ノ外ニ生シタル必要ノ費用ニ充ル爲メニ豫備費
ヲ設クベシ

第七十條 公共ノ安全ヲ保持スル爲メ需用ノ須要アル場
合ニ於テ内外ノ情形ニ依リ政府ハ帝國議會ヲ召集スル
事能ハザル時ハ勅令ニ依リ財政上必要ノ處分ヲナス事
ヲ得

前項ノ場合ニ於テハ次ノ會期ニ於テ帝國議會ニ提出シ
其承諾ヲ求ムルヲ要ス

第七十一條 帝國議會ニ於テ豫算ヲ議定セズ又ハ豫算成
立ニ至ラザル時ハ政府ハ前年度ノ豫算ヲ施行スベシ

第七十二條 國家ノ歳出歳入ノ決算ハ會計検査院之ヲ檢
査確定シ政府ハ其検査報告ト共ニ之ヲ帝國議會ニ提出
スヘシ

會計検査院ノ組織及職權ハ法律ヲ以テ之ヲ定ム

第七章 補則

第七十三條 將來此憲法ノ條項ヲ改正スルノ必要アル時
ハ勅命ヲ以テ議案ヲ帝國議會ノ議ニ付スヘシ此場合ニ
於テ兩議院ハ各其總員三分ノ二以上出席スルニアラザ
レハ議事ヲ開ク事ヲ得ズ出席議員三分ノ二以上ノ多數
ヲ得ルニアラザレバ改正ノ議決ヲナス事ヲ得ズ

第七十四條 皇室典範ノ改正ハ帝國議會ノ議ヲ經ルヲ要

十五

セズ皇室典範ヲ以テ此憲法ノ上規ヲ變更スル事ヲ得ズ
第七十五條 憲法及ビ皇室典範ハ攝正ヲ置クノ間之ヲ據
更スルヲ得ズ

第七十六條 法律規則命令又ハ何等ノ名稱ヲ用ヒタルニ
拘ラズ此憲法ニ矛盾セザル現行ノ法令ハ總テ遵守ノ効
力ヲ有ス歲出上政府ノ義務ニ係ル現在ノ契約又ハ命令
ハ總テ第六十七條ノ例ニ依ル

明治二十二年二月十六日御届
明治二十二年二月十六日出版

編輯者 名古屋區入江町四十番戶
著作者 竹村常八

印刷者兼總行者 名古屋下長者町九十三番戶
山田小十郎

發行所 名古屋鐵砲町
觀堂